

大阪の生んだエジプト学者

加藤 一 朗

本屋さんの肩をもつつもりではないが、昭和10年前後に刊行された平凡社の『世界歴史大系』はわが国の歴史学研究史上1つのエポックを画したものととっても過言ではないであろう。わが国としては新しい諸分野について定本的な叙述がそのなかに含まれているからである。西洋史に関していえば、杉 勇の「アッシリア史」、石橋智信の「ヘブライ史」、濱田耕作の「エーゲ文明史」（実際は村田數之亮の執筆ときく）、岡島 誠太郎の「エジプト史」などがそれぞれである。ここにいう、「大阪の生んだエジプト学者」とはいうまでもなくこの岡島誠太郎のことである。同時に彼は日本の生んだ最初のオーソドックスなエジプト学者であった。彼の研究はほとんど独学といって直しいものであるが、当時のわが国の、『埃漢文字同源考』（昭和8年刊行、本学図書館にも1部おさめられている）の著者板津七三郎らによって「漢字はエジプト文字から派生した」というようなことがまじめに論議されていたような環境のなかで、ひとりオーソドックスな道を進んでいたということは特筆にあたいする。それかあらぬか上記「エジプト史」は戦後復刻されて、今日いやましにふえつつあるエジプト研究者のあいだでも高い評価をえている。ちょうどH. J. プレストッドの「エジプト史」（英文）が、くりかえし復刻されているように。

岡島（明治28年生、昭和23年没）の生涯をふりかえると、孤軍奮闘の感が深い。大阪のおもにガ

ラス製品をとりあつかう貿易商の家に生れ、中学から大倉高商に進み、卒業後家業をつぎ、いちぢるしく商才を発揮した。しかし同時に向学の心

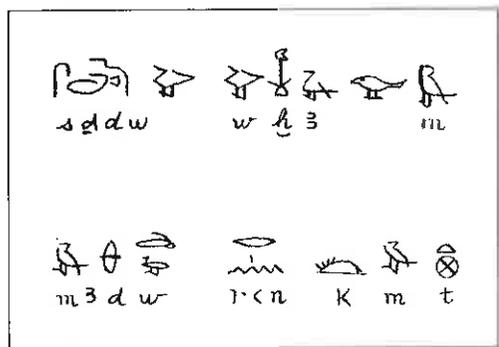


研究中の岡島誠太郎

やみがたく、何がきっかけであったかは、今日となってはたしかめようがない。しかしとにかく、縁故をたよってイギリスにわたり、おもに大英博物館などを利用して、約1年勉強にはげんだ。また渡英の途次エジプトの現地を訪れたことも充分考えられる（阡陵No.11のなかの拙稿「木村健助先生とエジプト」の項参照）。岡島のこのような生きかたに、親戚一同はこぞって反対したという。父だけが味方で相応の援助を惜しまなかったらしいが、岡島の商人としての才能を高く買っただけに、ほかの後継者を養成していなかったために、家業はつぶれてしまった。

帰国後京大西洋史学科の選科生となり、のち本科生に変わり、卒業は昭和2年である。同期生のなかには本学名誉教授であった故原弘二郎や、本学に多年非常勤講師として出講していた猪谷文臣がいた。しかし、岡島は他の学生よりも10才ほど年長で、すでに妻帯もしていたので、いわゆる、オンケル（オジちゃん）であり、あまり同期生とのあいだにつきあいはなかったらしい。しかし主任教授の坂口昂には目をかけられ、卒業後しばらくして奈良女高師（現奈良女子大）の教授に就任する。何年間か非常勤として京大にも出講している。おなじころ京大非常勤講師であった上記村田とのあいだにはかなり親交があったらしい。筆者も両者の講義の受講者のひとりであったが、岡島の講義のテーマはエジプト史ではなくイスラム史であった。

しかしこの間に岡島は騰写印刷によって『埃及語小文典』（以下Aと略称）と『こぶと語小文典』

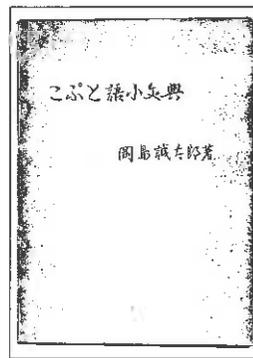


岡島誠太郎筆跡

(以下Bと略称)とを刊行している。(Bの表題のなかの「こぶと」については阡陵No.9のなかの拙稿「コプト人のランプ」を参照されたい。)Aは、「中期エジプト語 (Middle Egyptian)」をとりあつかったものである。今日でも中期エジプト語とコプト語の研究がエジプト学の基礎となっていることを思い合わせると、岡島が独学でこのことを見ぬきAB両文典を刊行したことは特筆にあたいする。Aの執筆はA. エルマンの『エジプト語文典』(独文)によっている。それはそれで正しい方法であったが、長いあいだエジプト学のバイブルとされてきたA. ガーディナーの『エジプト語文典——中期エジプト語への手引き』(英文)を参考にしなかった点は少しく奇異な感じをうける。岡島の研究時代にこの文典はすでに刊行されていたはずであるが、Aのなかにこれを用いた形跡はなく、また筆者の調べた限りでは岡島の蔵書のなかにこの書はふくまれていなかったようである。それはともかく、岡島には生前エジプト学上の弟子がなかったらしく、そのことが淋しくて、晩年の岡島はイスラムの研究に深く入りこんだものと伝えられている。ただ、私事にわたって恐縮であるが、戦後、そして岡島の没後、筆者は村田から、AとBとをおくられ、Aをひもといたことが、筆者がエジプト学に進むことになった、1つの大きなきっかけとなった。また筆者が「岡島文庫」(岡島の旧蔵書、京大図書館におさめられている)のなかのあれこれを探っているうち、イギリスの著名なエジプト学者バッジの『ミイラ (Mummy)』(英文)の巻末に鉛筆書きの岡島の手で「種々教えられるところがあったが、どうも一貫性のないのが残念である」といういみのことが記されていたのは印象的であった。バッジはたしかに偉大なエジプト学者であり、——学界にもナショナリズム的な要素もあって——イギリスではとくにもてはやされ、その龐大な遺著はくりかえし復刻されているのであるが、どうも多く書きすぎたきらいがあり、玉石混淆の感はぬぐいえない。最近ではイギリスでもエジプト学者のなかに、「バッジのものは年々多数復刻され、依然多くの読者をえている。このことは残念なことであるが、どうしようもない」といってはばからないものも現れている。岡島がバッジに批判的であったことは卓見であったといえよう。



エジプト語文法書



コプト語文法書

晩年の岡島は、奈良女高師でおそらく西洋史一般について講じていたが、他方において、熱心なクリスチャンであった彼は、戦後食料事情のいちじるしくわるい時期に、奈良のキリスト教会のためにあまりにも熱心な活動をつづけていたことが命とりになったともいわれている。このような岡島の生涯を大阪文化の伝統のなかでどのように位置づけるべきかは、筆者の任をこえることであるが、とにかくそれは開拓者の生涯であった。月給を大巾にさいて文献購入にあてていたらしく、「父の研究は、私どもの家庭にあって、かなりの負担でした」とは息女汀子(現姓加久間)の述懐である。この汀子は少女時代、長広敏雄(考古学者、京大名誉教授)にピアノを習い、汀子の息女たちのひとりには音楽の道に、ひとりには絵画の道に進み、現在ともに滞欧中ときく。岡島の血のなかには、商人と学者・芸術家との2つのものがともに流れていたといつてよいであろう。

本稿には酒井傳六の『エジプト学夜話』のなかの「日本のエジプト学」についての叙述と多少重複するところがあるかも知れない。しかし、同氏のこの項の執筆に際しては、筆者も種々資料を提供しているので、この点に関しては、同氏と読者諸士のお許しをいただけるものと思う。なお岡島の上記外の著作・論文については、学術季刊誌、「西洋史学・Ⅲ」のなかで、村田が、岡島の遺稿「古代エジプトの個人的一断面—第三王朝の性格—」とならんで「岡島誠太郎氏著作目録」を載せているので、ここでは割愛する。

(本文中敬称・敬語省略)